

Like A Bird 空へ

チームワークが支えた「鳥人間コンテスト」の優勝



榎浅沼組 経理部 中央水産委が筆者
東 明 由 紀

「鳥人間コンテスト」の紹介

日本テレビ主催で毎年1回、滋賀県びわ湖畔で開催される。今年で14回を数える。近年、300~400件の応募があり、10名の専門審査員が設計図、書類で安全、性能などの点から審査を行い、70機を選出する。コンテストは鉄骨で組んだ10mのプラットホームから1機ずつ滑空させて、着水した所までの飛んだ距離を競う。

賞には、プロペラ部門(優勝100万円)、グライダー部門(優勝100万円)、レディースバードマン部門(女性パイロット:30万円)があり、応募資格は健康な人ならば、性別、年齢、人数を問わずだれでも応募できる。

225.9m飛ばした“アクティブギャルズ”の誕生

“うまくいった！これはいきそうです！応援団の目の色が変わった！距離はグングンのびている！緩やかに左に旋回しながらまだ飛んでいる！一体どこまで行くのでしょうか!?” 私達の CHICK-235 機は 225.9m という思ってもいない大フライトを遂げ、赤い夕焼けの琵琶湖にその翼を休めました。

CHICK-235 機的设计・製作者であるわがチームのリーダーは、幼いころから模型飛行機に興味を持ち、実機グライダーの経験もあります。飛行機を通じての仲間も多く、そういった人達が「鳥人間コンテスト」で活躍しているのを見て、自分も参加してみたいと思っていたのです。

チームリーダーがコンテスト出場を決心してからまず最初に苦労したことは、チームのメンバー集めでした。機体の設計は一人でできたとしても、製作してそれを飛ばすことまではできません。やはり、ともに悩み、励まし合えるメンバーが必要なのです。

チームリーダーの「コンテストのレディースバードマン部門に出場したい」という夢を聞いて、そんなに大きな夢を持った人が私達の会社にいたんだというこ

とに感激し、好奇心旺盛な私たちはすぐに参加を決意しました。

チームリーダーとギャル4人の“アクティブギャルズ”の誕生です。63年の末のことでした。「毎年テレビで見ていたあのコンテストに自分たちが参加できるなんて」と私達は大喜びした。

しかし、“アクティブギャルズ”としての活動していくにつれて、テレビで見ているだけではわからなかったコンテストの裏側の苦労というものを目の当たりにし、単なる「楽しもう」という気持ちだけではなくなくなっていきました。



225.9mも飛んだCHICK-235機

グループを目的別に分業化

チーム結成後、コンテスト参加申し込みを済ませてからしばらくの間は、実質的な活動はなかったのですが、3月に入ってコンテスト選考会の書類作成を皮切りに、本格的な活動が始まりました。書類審査で合格となり参加が決定すると、メンバーに男子3名、大学生6名を加え、体制を整えました。

私達の目標は「素人の女の子を自作機のパイロットにして、レディースバードマン部門の上位入賞(目標飛行距離150m)」というものでした。「7月の本番までわずか4ヶ月足らずという短期間で、もっとも効率的な成果を得るには!?”というのが私達の考えた事でした。そこで、私達はパイロットの訓練・教育を主目的とするメンタルレベルでのグループと、機体の製作・各種試験を担当するオブジェクトレベルでのグループの、大きな2グループに分けました。更に、それぞれのグループの中でもいくつかの部門に分けるといふ、徹底した分業化をめざした組織づくりを行いました。

“和”が崩れる!!

さて、私達が各担当部門に分かれて活動していくうえで、重要な課題としていたのが、パイロットの安全確保です。なにしろ10mの高さのプラットホームから56kgの機体とともに飛び降りるのですから、水面に激突したときの衝撃の大

きさは、想像を絶するものがあります。安全確保を何事にも優先させるのは、当然のことと言えます。オブジェクトレベル、つまり機体の設計・製作の面においては、設計コンセプトにフェールセーフを採用し、あらゆる点でパイロットの安全を確保していました。

しかし、私達が一番頭を悩ませ



図・1 チーム内の連携サークル



適性検査（体力・反射神経・グライダーの操縦）も行ったのですが、優劣がつけられませんでした。一応メインパイロットは決まっていたのですが、リーダーの目から見て体が華奢過ぎるということの他に“飛ぶ”ということの恐ろしさをわかっていないという点から、変えるべきではないかという話がコンテスト2週間前になって出てきた訳です。

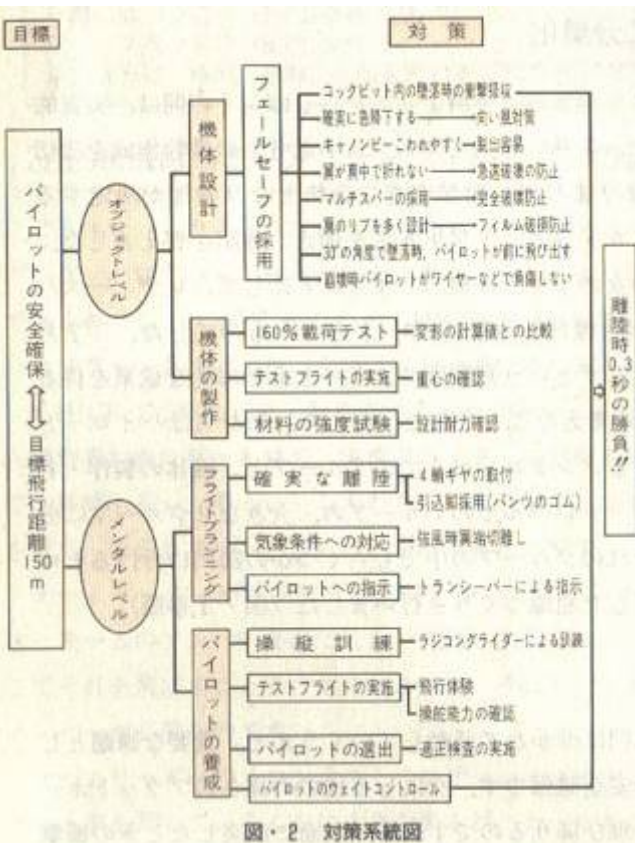
もう一人のパイロットは体重がオーバーしているという問題がありましたが、恐ろしさをわかっている分だけ、機体がどんなにピンチに陥っても対応していけるだろうというみんなの思いで、ついに変える事になったのです。しかし、パイロットを変えると決めたのはいいのですが、それを2人に告げると、最初のメインパイロットは落胆するだけでなく、練習に来にくくなるのではないかと、それによってまた、盛り上がってきたチームの和、そして女の子の仲が壊れるのではないかという気がして、今度は誰が言うべきか、またどのように言えばいいのか悩んだのです。

結局、パイロットの最終決定は、女の子の口からではなくリーダーから伝えることになりました。私達は両パイロットを慰め、励ましながら、何とかコンテスト当日までこぎつけた訳です。

一つの目的に没頭できるすばらしさ

このようにして、起こった数々の問題の対策方法をチーム全員で考え、意見をぶつけ合い答えを出してきたことによって、強い信頼が生まれ、それがパイロットの精神面での支えとなったことが、今回の総合優秀につながったのだと思います。個人プレー的な普段の生活とかけ離れ、一つの目標に向かってともに考え進んでいくという、貴重な体験を私達はした訳です。

また、パイロットの精神面だけではなくメンバー全員の支えとなったものは、やむをえず当日参加できなかったメンバーや、飛行機に没頭している私たちを見守りフォローしてくれた家族、そして心から応援してくれた会社の人たち・・・、陰で支えてくれた人達全員の期待です。



図・2 対策系統図



たのは、パイロットの選出でした。3ヶ月の間、一緒に訓練してきた2人のパイロットのうち、どちらがコンテストで飛ぶかを決めるに当たって、私達はかなり悩みました。2人とも、自分が飛ぶつもりで訓練しているのですから、どちらを選ぶにしても心苦しいものがありました。

そして現在、私たちは14回大会に向けて“アクティブギャルズ”をよりグレードアップさせるために、日夜（というのもオーバーですが）様々な考えを巡らせて実行へと移しつつあります。また、私達を悩ませ、苦勞する問題は多々生じるとは思いますが、私達大得意の明るさでチームを盛り上げ、今回以上の飛行とパフォーマンスをお見せすることをお約束します。

それでは、8月の暑い夏の夜に、お茶の間のテレビでお会いしましょう!!